第十一講　宗教論・日本文化論〈選択肢問題〉

明恵（みょうえ）が草庵をたてた白上（しらかみ）(注1)の峰にしても、晩年に住むことになった栂尾（とがのお）にしても、趣きは異なるが、いずれも素晴らしい自然を感じさせる所である。明恵にとってはこのような自然に包まれて在ること、そのことが宗教的体験であったと思われる。日本人である限り、自然への親近感を持っているものであるが、彼の場合はその度合いが極めて深く、後にも述べるように、それが彼の信奉する華厳の教えとも結びついているところが特徴的なのである。明恵が月夜の晩に弟子とともに船に乗り、紀州の苅磨（かるま）の嶋という島へ渡ろうとしたときの様子が『行状』(注2)に語られている。そこにはそのときの情景を語る美文がつづられているが、その文に「更ニ此ノ外ニ何ノ聖教ヲカ求メム」という語が続く。自然に接し、自然の心を知ることができたときは、今更別に経典を読む必要もない、というのである。明恵の自然に対する態度がここに端的に語られている。

この苅磨の嶋に明恵は一通の手紙を書いた。彼にとっては、島も人も同等なのである。面白いのは、この素晴らしい手紙を手にした弟子が、これをどこに持っていったらいいのかと尋ねると、明恵は「苅磨の嶋に行き、栂尾の明恵房からの手紙だと高らかに呼んで打ち捨てて帰って来なさい」と［A］答えていることである。明恵のいたずらっぽい微笑が目に見えるような気がする。彼は遊びに真剣になることのできた人なのである。

手紙は現存していないが、『伝記』(注3)にも『行状』にも相当に詳しい記録が残されている。後者の方が長く、内容に多少の相違があるが、大筋においては変わりはない。この手紙には長い前置きのような部分があり、そこでは<u>B島に対して手紙を書くことの理論的根拠とでも言うべきこと</u>が語られているのである。筆者には、このような「［C］」を通じて、明恵が華厳の教えの真髄を弟子たちに伝えようとしていると思われるのだが、随分と難しい手紙で、これを貰った「島」もさぞ驚いたことであろう。「其の後、何条の御事候哉。罷（まか）り出で候ひし後、便宜（びんぎ）を得ず候ひて案内を啓せず候。」というような挨拶に続いて、島というものは欲界に属している存在であるが、木石と同様に「……<u>D非情なりとて衆生に隔て思ふべきにあらず</u>」という主張が述べられている。そして次に、国土というものは『華厳経』に説く仏の十身中の最も大切なものであり、毘盧舎那仏（びるしゃなぶつ）のからだの一部である、つまり、島は如来そのものだということが述べられている。実際、このあたりの文は「島」にあてて書かれているというよりは、弟

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

子たちに島を介して華厳の教えを説いているような感じである。ところが、この文に続いて調子が変わり、「島」に対する明恵の気持ちが［E］述べられるのである。その部分を『伝記』から引用してみよう。

「かく申すに付けても、涙眼に浮かびて、昔見し月日遥かに隔たりぬれば、磯に遊び島に戯れし事を思ひ出だされて忘られず、恋慕の心を催しながら、見参する期なくて過ぎ候こそ本意に非ず候へ」

このあたりは別に難しくなく読めて、「島」に対する明恵の気持ちがそのまま伝わってくる感じがする。このような島への思慕の情の表現に続いて、明恵は実に面白いことを書いている。

「又、其れに候ひし大桜こそ思ひ出だされて、恋しう候へ。消息など遣りて、何事か有り候など申したき時も候へども、物いはぬ桜の許へ文やる物狂ひ有りなんどいはれぬべき事にて候へば、非分の世間の振舞ひに同ずる程に、思ひながらつゝみて候也。然れども所詮は物狂はしく思はん人は、友達になせそかし」

桜の大木がなつかしく手紙など出したいこともあるが、そんなことをすると狂気かなどと言われないかと気になって、道理に合わない世間の習慣に同調して、心に思いながら表面に出さずにいたが、結局は狂気だなどと思うような人は云々、というのである。「非分の世間の振舞ひに同じ」ていたのが、最後のところで、「友達になせそかし」と言い切るところに、明恵の決意がよく示されている。この桜の木は、『行状』によると、高雄の中門の脇にある桜の木になっていて、そちらの方が正しいようであるが、［F］明恵が強調したいところを理解することが大切であろう。彼にとっては、人間や動物のみならず、無生物に至るまでが区別なく感じられるのである。G<u>「もの」と「こころ」の境界は、限りない相互浸透性をもっているのである。</u>

（河合隼雄の文章による）

注（１）和歌山県有田郡湯浅町栖原。
（２）明恵の弟子喜海の著『高山寺明恵上人行状』
（３）『栂尾明恵上人伝記』

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問１　空欄 A ・ E ・ F に入る最も適当な語句を、それぞれ次の中から選べ。

A　①　冷やかに　②　事もなげに　③　当惑したように　④　強い調子で

E　①　あっさりと　②　暗然と　③　綿々と　④　朗々と

F　①　なんと言っても　②　手っとり早く　③　それはともかく　④　とは言いながら

問２　傍線部Bについて筆者が十字以内で端的に述べている箇所を抜き出して記せ。

問３　空欄 C に入る二字の語を文中より抜き出して記せ。

問４　傍線部Dの主旨と合致する十字以上十五字以内ひとつづきの文章を、文中より抜き出して記せ。

問５　傍線部Gの言い換えとして最も適当なものを、次の中から選べ。

①　明恵の宗教的体験とは、自然界の存在物すべてと平等に心を通じ合うことであった。

②　無生物の中にまで「こころ」の存在を仮想するところに、明恵の信仰の真髄があった。

③　明恵の説く華厳の教えは、無自覚な区別や境界の意識を明確にしようとするものであった。

④　明恵が強調したかったのは、「もの」と「こころ」との不安定な相対的関係であった。

⑤　あらゆる自然を仏身の一部と認識することこそ、明恵の悟りの境地に外ならなかった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　河合隼雄＝かわい　はやお（一九二八〜二〇〇七）兵庫県生まれ、京都大学理学部卒。高校での数学教師を経て、アメリカ・カリフォルニア大学ロサンゼルス校（ＵＣＬＡ）へ留学。精神分析学者・元文化庁長官。くだいて言うと、日本で最も有名な心理学者。フルートの演奏も玄人（くろうと）はだしだそうです（プロではないのに、プロが裸足で逃げ出すほどの巧みな腕前ということ）。著書多数ですが、『こころの処方箋』は心理学に興味がある高校生向けと言えます

●明恵＝みょうえ（一一七三〜一二三二）鎌倉時代前期の僧侶

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

語句

華厳経＝けごんきょう→大乗仏教の経典の一つ。原義は「花で飾られた広大な教え」

衆生＝しゅじょう→仏教用語で、すべての生命あるもの・仏の救済の対象となるものです。とくに人間を指すことがあります

な～そ→古語で「禁止（～するな）」を意味する

真髄＝しんずい→物事の本質・エッセンス・その道の奥義。神髄とも書く。坪内逍遥の研究書は『小説神髄』

端的＝たんてき→短くズバリ

相対的＝そうたいてき→絶対的ではないということ

消息＝古典では「せうそこ」（しょうそこ、と発音します）→手紙のこと

恋慕＝れんぼ→ふつうは異性を恋い慕うこと

思慕＝しぼ→懐かしく思うこと

道理＝正しい論理・ことわり・本来あるべき物事の筋道

俗界＝天上界や聖なる世界に対して俗人がすむこの世界のこと・俗世間

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）自然に囲まれたソウ庵に暮らす　①僧　②壮　③葬　④相　⑤草

（イ）詳細なキ録が残されている　①基　②期　③記　④貴　⑤軌

（ウ）華厳経の経テンを弟子に伝える　①典　②展　③天　④点　⑤店

（エ）帰宅したら手洗いする習カンです　①観　②貫　③慣　④寛　⑤肝

（オ）美しいジョウ景を心に刻む　①上　②情　③場　④城　⑤常

（カ）ズイ分と難しい表現を好む　①隋　②随　③髄　④瑞　⑤遂

（キ）集合場所への行き方をアン内する　①案　②安　③行　④暗　⑤庵

（ク）久しぶりのアイ拶を交わす　①愛　②合　③相　④逢　⑤挨

（ケ）境界なく相互にシン透する　①侵　②浸　③深　④津　⑤請

（コ）深刻なケツ意の表明をする　①潔　②結　③決　④血　⑤傑

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十一講　宗教論・日本文化論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

明恵
自然への親近感の度合いが極めて深い
華厳の教え＝自然に接し、自然の心を知る
島も人も同等
「もの」と「こころ」の相互浸透

主な対比

敵役・比較相手

一般の日本人＝自然への親近感
明恵の弟子＝華厳の教えを学ぶ途上
非分の世間＝物いわぬ桜に手紙を書くことを「狂気」あつかいする

小さな対比

脇役

手紙を出した桜の正確な位置

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《空欄補充》

文脈に関係のあるいわばキーワード補充の問題です。まず［Ａ］は主役である明恵の態度を説明する言葉が入ります。しかも弟子との対比です。弟子は人間でもないしかも無生物の島に手紙を持っていってどうすればよいかわからず、明恵に「尋ね」ています。まだまだ修行が足りませぬな。一方、わかっている明恵は［Ａ］の具合に「答えている」のです。③の「当惑したように」はいちばんマズイです。これは弟子の態度であり、対比混乱の誤りを形成します。その正反対の②「事もなげに」が正解です。このすました態度にユーモアがあります。ゆえにこの後の表現、「いたずらっぽい微笑」や「彼は遊びに真剣になることのできた人」にもつながります。①の「冷やかに」や④の「強い調子で」では弟子たちは氷つきます。「微笑」と矛盾します。次に［Ｅ］です。こちらは手紙の文面に明恵の気持ちがよく表されているということで、③の「綿々と」が正解です。④の「朗々と」だと〝朗読〟つまり声を挙げて読むときの描写です。読み上げるのは弟子です。ここはあくまで手紙の文面での言葉の尽くし具合です。もちろん①の「あっさりと」では明恵の熱意に反します。②の「暗然と」は悲しい気持ちで心が暗い様子です。まったく適合しませんね。手紙に「涙眼に浮かび」とありますが、島への思慕・懐かしさの感動ですからね。悲しみじゃありません。続いて［Ｆ］です。こちらも対比を踏まえています。桜の木の場所をめぐる議論は〝置いといて〟、ということです。地理的な位置確定の話より明恵が「強調したいところを理解することが大切」ということです。この対比をなりたたせる語句は、③の「それはともかく」だけです。

問２《傍線部説明・抜き出し》

「島に対して手紙を書くことの理論的根拠」は華厳の教えのことです。その内容は、傍線部のすぐ後に次のように書かれています。「国土というものは『華厳経』に説く仏の十身中の最も大切なものであり、毘盧舎那仏のからだの一部である、つまり、島は如来そのものだ」です。設問条件が十字以内ですので、「島は如来そのものだ」を抜き出します。島は仏様が姿を変えたものなのだよ、だから手紙を書くのだよというわけです。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問３《空欄補充・抜き出し》

［Ｃ］には「このような」という指示語とカギカッコが付いていますから、空欄より前に一度登場している語句だとわかります。二文字ということで「手紙」と解答した人もいると思いますが、それは〝部分的指摘〟です。もっと大きく〝弟子を遣わして島に手紙をおくる〟という一連の行為の全体を示す言葉です。第二段落にあるように、明恵はそうした「遊びに真剣になることのできた人」です。したがって「遊び」が正解です。

問４《傍線部説明・抜き出し》

傍線部は「非情」つまり島には心などないと決めつけて、「衆生」つまり生命あるもの、とりわけ人間との間に隔て・区別を考えてはいけないという意味です。これと同じ意味内容を表現している十字〜十五字以内の表現を探します。最終段落の「『もの』と『こころ』の境界は、限りない相互浸透性をもっている」も同じ意味ですが字数が適合しません。またここは傍線Gです。他の設問箇所が別の問いの答えになるということもふつうはしません。そこで「島も人も同等なのである」を採用します。十一字です。なにより、隔てなし区別なし境界なしをズバリ言い当てています。句点（。）を入れて十二字でもOKです。

問５《傍線部説明・選択肢》

今回の文章における主役・メインメッセージを問うものです。まず③は「区別や境界の意識を明確にしよう」が×です。これじゃ「非分の世間」レベルです。島や桜に手紙を出すような行為を頭のヘンなヤツとみなすレベルです。はっきりと対比混乱の誤りです。④は「不安定な」という否定的表現が×です。筆者は、明恵に見られる人間と自然の境界のなさ、「もの」と「こころ」の境界のなさをポジティブに肯定評価しているのです。記述に反すると言ってもよいし、対比混乱の誤りと呼んでもOKです。さて、そうかといって自然界のものすべてが平等かというと、そうではありません。「国土」「島」がとくに大事なわけです。したがって①の「自然界の存在物すべて」、⑤の「あらゆる自然」が典型的な不当な全称判断となります。本文の通りが大事で、大きく言い過ぎても縮めすぎてもダメです。正解は②です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

問１　Ａ＝②　Ｅ＝③　Ｆ＝③　問２　島は如来そのものだ　問３＝遊び

問４　島も人も同等なのである　問５＝②

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第十一講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）①　（エ）③　（オ）②
（カ）②　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）草庵　（イ）記録　（ウ）経典　（エ）習慣　（オ）情景
（カ）随分　（キ）案内　（ク）挨拶　（ケ）浸透　（コ）決意

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。